【その他】《事例報告》

新入生合宿研修報告
コミュニケーション活性化と食を通じたもの作り体験

松永　藤彦[1]*，福島　博[1]，朝賀　昌志[1]，末松　伸一[1]，ウェンダコーン・スミトラ[1]，
稲津　早紀子[1]，井上　保[1]，奈賀　俊人[1]，高野　要[2]，牧志　貴明[2]，樋口　香織[2]，
高原　陽之介[1]，竹之内　健[1]，西田　裕人[3]，三原　和俊[1]

本学では専門的かつ実践的な学びの場への新入生の適応を促すため，また少人数教育の場で円滑な人間関係を築くために，入学時オリエンテーションの一環として合宿研修を行っている．また，食品製造の原点として火起こしからはじめる自炊を体験すること，そして食品製造現場で求められる規範意識を高めることも目的としている．上級生の一部はピアサポーターとして帯同し新入生のサポートを通じて自ら成長する機会となっている．３回目である2013年の内容を中心に新入生合宿研修の内容を報告する．

キーワード：オリエンテーション，新入生合宿研修，大学適応，コミュニケーション，もの作り体験

取り組みの背景

東洋食品工業短期大学は包装食品に関わる技術に特化した２年制の単科短期大学である．定員35名の少人数教育を背景に，缶詰やレトルト食品などの製造に必要な専門的知識と技術を学ぶことができる．明確な志や目的意識を持った学生にとっては短期間で高度な実学を修める場である．しかしその一方で，自分の将来や目標が明確でないまま入学した学生もいる．本学では１年生のうちに専門教育がスタートし，就職活動も同様である．したがって早期の段階に学生生活への適応を促す機会を設けることは重要な意味を持つ．

本学は学生数が少なく，教職員を含めても100人を切る．全ての人とあっという間に知己の間柄になるが，これは逆に言えば逃げ場のない人間関係に囚われるとも言える．実際に，刎頸の友や将来の伴侶に出会い関係を深められる学生がいる一方で，卒業まで人間関係に苦しむ学生も見受けられる．また，本学の特性上，会社から派遣されたり，４年制大学を卒業後に再入学してくる学生が毎年数名存在する．時には10歳以上年齢差があることもあり，多様な背景を持つ学生同士が円滑なコミュニケーションをとる必要がある．

ベネッセが行った調査結果をもとにした分析によると，大学生の大学への適応と大学での友人関係には関連があり，大学の友人関係は大学生活の満足度を左右する大きな要因である[1)]．文献1の論説において谷田川は，大学の友達と知り合うきっかけとして「１年生の時の授業」「部・サークル」につづき第３位に「入学時のオリエンテーション」が続くことを指摘している．したがって，入学時のオリエンテーションに新入生が交流できるプログラムを用意することにより，その後の大学生活に良い効果をもたらす可能性が示唆される．本学では2010年より新入生向けにコミュニケーションを促進するプログラムの企画をはじめ，2011年からオリエンテーション時の合宿研修を開始した．

本学の特徴を考えた時に学生の資質として重要となるものとして，もの作り体験と集団生活における規範意識が挙げられる．入学してくる学生の中には，食品系の大学に入学したにも関わらず自分で食事をつくったことのない者すら存在する．本学は２年制短期大学でありながら専門度の高いカリキュラムを提供しており，学生は速やかに食の世界，もの作りの世界に適応することが求められる．また，卒業後は食品製造にたずさわる者が大多数を占め，食の安全と安心に直接関わる者として，工場勤務において高い規範意識が求められる．そこで，オリエンテーション時の合宿研修では自炊経験を通してもの作り体験をし，また集団宿泊を通して規範意識を高めてもらえるような内容を企画した．

３年間の間にプログラム内容に多少の変更があったが，入学直後の学生間コミュニケーションの促進，自炊を通した食品製造の原点体験，そして集団生活の基本的な約束事遵守，これら３つの目的は一貫している．本稿では2013年４月の合宿研修を中心に内容を紹介する．

*連絡先，Email：fujihiko_matsunaga@shokuken.or.jp
[1]東洋食品工業短期大学包装食品工学科，[2]事務室，[3]総務部

取り組み方法

研修施設

大阪YMCAが運営する紀泉わいわい村において合宿研修を実施した．紀泉わいわい村は数十年前の日本の里山生活を模した研修場である．宿泊するのは伝統的な里山の民家を模した家屋である．テレビもなく携帯電話もほとんど通じず，照明も少なく薄暗い家に寝泊まりし，静かな山間に流れる川の流れや鳥の歌を背景に普段とは全く異なる生活環境で実施した．

参加者の構成

オリエンテーションの一環として全ての新入生を対象に実施した．新入生30名，教職員５名，ピアサポーター（２年生）５名が参加した．新入生を５班にわけたので，教職員とピアサポーターは１班あたり１名ずつの割合となる．班分けに際してはアクティビティごとに可能な限り班の構成員を変え，できるだけ多くの者と交流するよう配慮した．

日程

2011年と2012年の２回は２泊３日，３回目の本年は１泊２日で実施した．３回とも入学式の直後に実施している．本年は，４月２日に入学式を挙行し，学内オリエンテーションと懇親会が終了したあとで，４月５日から１泊２日の研修を行った．

プログラムの内容

本プログラムの内容は教員と職員で構成される学生支援委員会を中心に企画運営した．

初日は昼夜に合計３回のセッションを設け，段階的に学生間のコミュニケーション促進を図った．到着後まず簡単な自己紹介を行い，昼食後はアイスブレークを行った．夕食後は数名ずつのグループに分かれ，断片化された情報から地図を作製する共同作業を行った[2)]．２日目の朝は１年生クラス全員の共同作業としてクラスのキャッチフレーズと同期名を討論の上決定した．

食品製造の原点として朝晩の食事は自炊した．薪を割り，かまどでの火起こしからスタートする作業に教職員は原則介入せず，新入生とピアサポーターだけで行った．風呂もいわゆる五右衛門風呂で，火を焚いて温度調整しながら入浴した．食品製造の現場で重要な日常の整理整頓や清掃も励行し，特に研修終了時には徹底的に整理整頓と清掃を実施した．

過去２泊３日で実施した際は前述の内容に加え，大学で学ぶにあたっての心構えや大学の成り立ちや学びの内容，そして自分の将来の夢や目標と大学の学びをつなげることを意図したプログラムを入れていた．本年度はこれらの内容の多くを学内オリエンテーションにて実施した．

新入生に対するインパクト

合宿研修最終日に振り返りを行い，研修中の自己評価や研修自体の評価をしてもらった．その内容を中心に新入生が感じた本研修のインパクトを紹介する．いずれの設問も「強くそう思う」「そう思う」「そう思わない」「全くそう思わない」の４段階で回答してもらった．今回「全くそう思わない」という回答はなかった．また，自由筆記欄の主要な意見を抜粋し紹介する．

コミュニケーションについて

学生間，教職員と学生の間でコミュニケーションを深めることが出来たかという問に対しては「強くそう思う」30％，「そう思う」63％と，本研修が非常に効果的であることが示唆された．また，自炊などのものづくりに積極的に取り組めたか問うたところ，「強くそう思う」13％，「そう思う」83％，であった．グループセッションなどでの共同作業に積極的に取り組めたかという問では，「強くそう思う」７％と「そう思う」80％，「そう思わない」が13％であった．いずれも約９割の学生が肯定的に自己評価しており，本研修の目的の一つである新入生のコミュニケーション促進について学生自身は目的を達せられたと評価していることが分かる．この点については昨年もほぼ同様の結果が出ている[3)]．ただし，昨年も参加したピアサポーター（２年生）からは，２泊３日の方がより効果的だったのでは，という意見もだされた．

学生の自己評価を裏付けするように，最初は遠慮がちだったり，なかなか他人と話せなかった学生でも次第に打ち解けていく様子が観察された．１泊２日の短期間であるが，学生は濃密な時間を過ごし，期間中目に見えて学生間のコミュニケーションが良好になったと判断された．

コミュニケーションについて，新入生から得られた自由筆記意見を以下に抜粋する．

- 周りの人と積極的に会話したりコミュニケーションがとれるようになった．
- 自分のコミュニケーション能力が前より上がった気がする．
- 色々な人とコミュニケーションをとり，役割を決めて協力して何かを行うことに対する姿勢が分かり，大切さを知った．
- 入学した当初はあまりたくさんの人と話したりすることは出来ませんでしたが，この学外研修を通じてたくさんの人と関わることが出来る様になりました．
- 今までは相手の反応が少し怖くて話しかけたりできませんでした．今はほんの少しですが，あまり知らない人とも話せる様になったと思います．
- 45分で地図を作るグループセッションでは言葉で相手に伝える難しさが分かった．
- 地図を描く時に複数の人が同時にコミュニケーションをとることの難しさを感じ，これから学びたいと思います．

もの作り体験について

火をおこすことからスタートして自炊する体験は，多くの学生に強い印象を与えていた．本学で２年間食品製造を学び，そして卒業後も食品製造に携わるであろう学生にとって貴重な体験となったと言える．この点について学生の自由筆記意見を以下に抜粋する．

- 自炊が印象に残った．初めての経験でした．火をつけるところから全て自分たちでやり，貴重な体験ができました．
- 自炊が印象に残った．自宅に帰ると体験できないようなことばかりだったから．
- かまどやいろりなど今の時代には珍しいものを使ってすごしたことが印象的だった．
- 昔の人はご飯を炊くだけでも時間が掛かって，でも時間をかけじっくりとした分だけおいしいものができるんだなと思った．
- 火起こしが最初うまくいかず，皆で色々と試してどうにか火が使えたときは嬉しかった．

生活態度について

本学では学生の人間性を重要視した教育を行っている．「挨拶などの基本的な礼儀を実践できた」かどうか研修中の態度を問うたところ，「強くそう思う」23%，「そう思う」73%とあわせて96%に達した．また，「整理整頓や後片付けがきちんとできた」かどうか問うたところ，「強くそう思う」40%と「そう思う」60%と，全ての学生が肯定的に自己評価した．「時間を守ることができた」かという設問に対しては「強くそう思う」23%，「そう思う」70%と，こちらも高い自己評価を下していた．研修の最終日にはチェックアウトの時間までに片付けと清掃を終了させ，その出来をわいわい村の職員の方々に厳しくチェックして頂いている．初年度は片付け・清掃ともに問題点が指摘されやり直しが必要だったたが，昨年と本年度は滞りなく終了することができた．以下，新入生の自由筆記意見から抜粋する（サンプル数が少なかったので一部昨年度の意見も含まれている）．

- 最後に掃除をしたことにやりがいがあった．
- 夕食，入浴の準備，片付けは，それぞれが役割を果たしスムーズに済ませることが出来た．
- 社会的ルールなどあたりまえの事ができた．
- ご飯作りや片付けのとき，他にやることはないかなど考えて行動できた．
- 自分から何かやることを見つけて行動できるようになりました．
- 片付けなどのめんどくさいことも率先して行うようになった．

研修プログラムおよびピアサポーターについて

最後に，本研修自体に対する評価とピアサポーター（２年生）に対する評価を問うため「ピアサポーターの存在は心強かった」かどうか質問したところ，「強くそう思う」80%，「そう思う」17%とピアサポーターに対する高評価が際立っていた．ピアサポーター自身が新入生だった昨年，同様に先輩達を高く評価しており[3]，その姿を糧に1年後自分たち自身が成長した姿を見せられた結果ではなかろうか．

「研修の目的が明確で，かつそれを実践できるプログラムだ」と思うか問うたところ，「強くそう思う」20%，「そう思う」80%と，研修自体に対する評価も高かった．

ピアサポーターへのインパクト

昨年度から数名の２年生にピアサポーターとして帯同してもらっている．その経験はただの手伝いでなく，彼ら自身の成長にもつながると思われる．研修終了時にピアサポーターにも研修を振り返ってもらい，「コミュニケーション促進のために積極的に動けた」「新入学生に対して適切なサポートが出来た」などの設問に答えてもらった．今回参加した５名のピアサポーターはいずれも自ら希望しただけあって，いずれの項目についても「強くそう思う」「そう思う」をあわせて100%の肯定的回答であった．また，「ピアサポーターは必要だと思うか」との問に対しても全てのピアサポーターが「強くそう思う」と回答した．以下にピアサポーターの自由筆記意見を抜粋する（サンプル数が少なかったので一部昨年度の意見も含まれている）．

- どうしてもコミュニケーションをとるのが苦手な子がいるので，それを気遣う人も出てきてよかった．
- 自分から積極的にコミュニケーションをとろうと思った．
- 自分自身でもグループディスカッションでどうすればまとまりやすく，また意見を出しやすくできるか色々工夫しながらやったので勉強になった．
- 先輩という立場になったので，自分のことをしっかりしつつ，後輩たちを気にすることが出来た．
- 最初は自分自身硬かったと思いますが，１年生もそうでした．誰ともグループになっていない人にはできる限り話しかけましたが，時間が立つにつれそういう人も少なくなったと思います．食事班や宿泊班がいろいろ変わったおかげでたくさんの人と話すことができたと思います．一人相手に一時間話し合うこともありました．しっかり話も聞いてくれて，また質問を投げかけるとかえってくる，そんな感じが好きでした．ピアサポーターとして役立てたかはわかりませんが，このような参加の機会をいただき，ありがとうございました．今回の１年生の中にピアサポーターを来年やりたいと思ってくれる人がいて良かったと思いました．

本取り組みからの示唆や課題

合宿研修の目的について

この合宿研修がスタートしてから最初の２回は，「将来の夢や目標を考えること」や「大学のカリキュラムを把握する内容」を入れていた．本年度はこれらの内容の大部分を学内オリエンテーションに組入れた．過去の研修を振り返った結果，合宿研修だからこそ効果的に出来る事に目的をしぼった方が良いという意見が多かったためである．その結果，研修目的をコミュニケーション促進ともの作り体験，そして集団生活の基本的なルールを学ぶことに絞った．これらの目的は達成できたと判断しており，研修期間を１泊２日に効率化することが出来た．ただし，昨年と今年を比較したピアサポーターの中には，宿泊日数が減ったことでコミュニケーション促進の機会が減ったのではないかという意見があった．宿泊日数を減らしても最大限の効果が得られるような工夫を今後も考えていくべきであろう．

ピアサポーターの参加について

先に述べた通り本研修が２年生のピアサポーターにも良い影響のあるのは間違いない．特にリーダーシップの発揮や他者を思いやるコミュニケーション能力の向上に効果があると期待される．しかし，現時点で事前にピアサポーターとしての事前準備やスキルアップの機会を設けていない．教職員も同様だが，ファシリテーションする側をどうサポートするかが課題として残る．

教職員の参加について

本研修で中心的な役割を果たすのは学生支援委員長（２年生の担任）と１年生の担任・副担任である．その他，教職員がサポートとして数名参加した．普段の教育指導とは異なる環境で学生と密な関係をとることが出来るので，教職員にとっても良い研修機会となることを期待している．しかし，実際にどのような影響を与えたかは調査しておらず今後の課題である．研修に帯同することは教職員にとって負担でもあり，実際に他大学では教職員側が敬遠してこの種の取組を止めるケースもあると聞く．研修機会提供の意味からも，また負担軽減の意味からも，できるだけ多数の教職員で持ち回りにすることが望ましいと考えている．

新入生の担任と副担任は，関西地区FD連絡協議会の共催事業として公開される平田オリザ氏の講習会（大阪大学）に参加し，コミュニケーション促進の技法を学んでいる．しかし，それ以外にファシリテーションの技法を身につける機会がなく，個々人に任せられているのが現状である．この点も，今後サポート体制を考える必要がある．

合宿研修が２年間の学生生活に与える影響

この合宿研修を体験した学生がその後どのように成長したか，学生生活にどのような影響があったかは今後評価していく必要がある．第1回目の合宿研修を体験した学生がこの春卒業したので，卒業後に簡単な調査を行った．本稿ではその結果を紹介するにとどめる．

合宿研修に参加した43名の学生中20名に対して，合宿研修が学生生活に良い影響をもたらしたかどうかを問うた．その結果13名から回答を得られ，その13名全員が「良い影響があった」と回答した．自由筆記には以下のような意見があった．

- 仲良くなるきっかけにもなりますし，思い出としても残ってますし良かったと思います．みんなで行動することが多いから自然と話すきっかけ出来るので，必要やと思います．
- 周りの人がどんな人間であるか知るきっかけになったので，その後の学生生活で自分と気の合う人間をみつけるといった，人間関係をつくる点では良い影響があったと思います．ただ，研修内容が人間関係以外に良い影響をあたえたかと言われれば，難しいところです．
- 年齢も離れているなかで最初に自分を知ってもらって，年下と協力しながら作業を進めて，お互いの距離を近づける為にはいい機会だったと思います．
- 最初にいろいろ不安なことがいっぱいありましたが，みんなと話したり活動を協力したりすることでその不安な気持ちがなくなりました．
- 普段生活している中で当たり前だと思うものから切り離されたことで協力することの大切さを学べたと思います．それが実習などにも繋がったのではないかと思います．あるのとないとでは全く違った大学生活になると思います．
- 最初は会ったばかりの人達といきなり行く事になって戸惑いましたが，とてもいい経験だったと思います．学校で普通に生活するよりもわいわい村でいろんな体験を一緒にする事でみんなの性格などをより早く知る事が出来たと思います．

謝　辞

本研修を実施するにあたり紀泉わいわい村のスタッフの方々にご協力いただいており感謝いたします．本稿を書くにあたり協力していただいた51期生，52期生，53期生の皆さんに感謝いたします．

資料・文献

1．http://benesse.jp/berd/focus/4-koudai/activity2/index.shtml　「大学への適応における友人関係の重要性　－高校までとは異なる人間関係をどのように構築するか－」，谷田川ルミ，ベネッセ教育フォーカス「大学生調査にみる高大接続の諸相」，2013年６月17日，

2．http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f100221/p449701.html　「楽しくすすめるグループワーク～個と集団の気づきをうながす～」，神奈川県青少年指導者養成協議会，2012年３月24日

3．https://most-keep.jp/keep25/toolkit/html/snapshot.php?id=499815275426782　「新入生合宿研修：コミュニケーション機会提供と学びの目的意識促進のこころみ」，松永藤彦，関西地区FD連絡協議会「FD活動の報告会2012」，2012年５月８日